



TITLE:

現代社會學に於けるパレト社會學 の地位

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 現代社會學に於けるパレト社會學の地位. 經濟論叢 1937, 44(5): 33-52

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130953>

RIGHT:

神戸博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

經濟叢論

第四十四卷 第五號

(通卷第二百六十三號。禁轉載)

奉
呈

神戶正雄先生

執筆者一同

目次

滿洲移民の特異性と掃匪問題	法學博士 山本美越乃	一
農家の負債と負擔能力	法學博士 河田 嗣郎	二〇
現代社會學に於けるパレット社會學の地位	文學博士 米田庄太郎	三三
幕末の商稅論	經濟學博士 本庄榮治郎	三六
實際政策と政策原則	經濟學博士 作田 莊一	六六
『維新の詔』に於ける變革の國是	經濟學博士 石川 興二	七九
シュレーデルの王室金庫論	經濟學士 小山田 小七	七九
アダム・スミスに於ける自由主義社會の理念的構造に就いて	經濟學士 中川與之助	一二三
工場内勞働者教育事業の目的	經濟學士 大塚 一郎	一五九
アフタリヨンの貨幣心理說に就いて	經濟學士 松岡 孝兒	一六四
明治初年の官營産業に就いて	經濟學士 堀江 保藏	一六四
財政學の基本問題	經濟學士 大谷 政敬	一八三
取引所實物化論と短期清算取引の應用に就いて	經濟學士 今西庄次郎	二〇二
貨幣の中立性に關する一考察	經濟學士 中 谷 實	二三八
リストの國民生産力說	經濟學士 白杉庄一郎	二三四
財政學と經濟政策論との交流	經濟學士 島 恭彦	二五〇

目次

二

生産の構造と貿易……………	經濟學士 松井 清	三六九
租税の農業に及ぼす影響……………	經濟學士 山岡 亮一	三八六
再保険と共同保険との接近……………	經濟學士 佐波 宣平	三〇三
耕地管理組合に就いて……………	經濟學博士 八木芳之助	三二五
熊澤蕃山研究序説……………	經濟學博士 黒 正 巖	三三八
水産經濟學と其の課題……………	經濟學博士 蜷川 虎三	三五一
輸入制限と國內物價との關係……………	經濟學博士 谷口 吉彦	三六三
昭和の税制改革……………	經濟學博士 汐見 三郎	三八五
自然利子論……………	文學博士 高田 保馬	四〇七
財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて……………	商 學 士 武藤 長藏	四四四
現段階に於ける租税體系……………	經濟學博士 土方 成美	四七七
支那南北辨……………	法學博士 財部 靜治	四九七
赤字公債の消化……………	經濟學博士 小島昌太郎	五二二

現代社會學に於けるパレット社會學の地位

米田 庄太郎

一 力學的社會學の方針

社會學が歐米諸國に於て、一の獨立な學問として、盛んに研究され始めたのは、千八百八十年代、殊に千八百九十年代に入りてからである。そうして私が米國留學中、社會學を專攻することに決心したのは、千八百九十六七年頃であるから、大體上私は現代社會學が隆盛を致し始めた頃から、其の研究に従事して居ると云ひ得られると思ふ。今其の頃のことを憶ひ起して見ると、なるほど社會學の研究は、歐米諸國に於て盛んに行はれて來たとは云へ、今日の盛況に比すれば、まだ微々たるものであつた。當時社會學の研究が殊に勃興して居た米國に於ても、社會學の講座を設けて居た大學はコロムビア大學、シカゴ大學等の二三の大學に過ぎなかつた。英國に於てはまだ何れの大學も之を設けて居なかつた。そうして歐洲大陸にありても、之を設けて居たのは、スペインのマドリド大學（同大學は歐米諸國の大學中最とも早く社會學の講座を設けたと云はれて居る）とフランスのボルドー大學との二ヶ所ぐらひであつたかと思ふ。當時イタリは社會學の研究が最も盛んに行はれて居た一國であるが、併し何れの大學に於てもまだ社會學の講座は設けられて居なかつた。されば社會學の文獻も、今日のに比すれば、實に貧弱なものであつた。社會學専門

の雜誌としては、萬國社會學評論、社會學年誌、伊太利社會學評論、米國社會學評論等が、漸く發行されて來たぐらひであつたと思ふ。併し當時の社會學專攻者は、自から新しき學問の建設者を以て任じ、意氣甚だ盛んであつた。

千八百九十年代は、現代社會學が大に勃興して來た時代であるが、外部的に見れば上に述べし如く、まだ貧弱であつたのである。併し内部的に見ると大に注目すべきものがある。夫れは現代社會學の主要方針の殆んど總てが、其の頃に既に發達して居たことである。今其の事實を學ぶに最も便宜な著書は當時獨逸ライプツィヒ大學の私講師であつたバールトが、千八百八十七年に公にせる「社會學としての歴史哲學」¹⁾第一部であると思ふ。バールトは同書第一篇社會學的諸體系及び第二篇一方面的歴史觀に於て、其頃までの社會學或は歴史哲學の諸方針の發達を、廣く歐米諸國に互つて批判的に考究して居るのであるが、先づ第一篇社會學的諸體系に於ては、第一章に於て社會學の始源としてサン・シモンの社會學說、第二章に於て最初の社會學體系としてコントの社會學、第三章に於て分類社會學としてリットレー、ヅ・ロペルチー、ヅ・グレフ、ラコムブ、ヅクネル等の社會學、第四章に於て生物學的社會學として、スペンサー、フォン・リリーフエルト、シエーフレ、フィエー、ウォールム等の社會學、第五章に於ては二元主義社會學として、ウォード、マッケンジー、オーリウ、ギッディングス等の社會學を批判的に論究し、次に第二篇一方面的歴史觀に於ては、第一章に於て彼が個人主義的歴史觀と稱するもの、第二章に於て人間地理學的歴史觀と稱するもの、第三章に於て民族學的或は人種學的歴史觀と稱するもの、第四章に於て文化史的歴史觀と稱するもの、第五章に於て政治的歴史觀と稱するもの、第六章に於てイデオロギー的

1) Paul Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, Erster Teil: Einleitung und Kritische Übersicht. 1897.

歴史觀と稱するもの、第七章に於て經濟學的歴史觀と稱するものを批判的に論究して居る。パルトは從來の歴史哲學は社會學として發展される可きである、或は社會學は歴史哲學であると觀る彼の見解からして、其の頃までの社會學の諸方針を、右に述べしが如くに分類し、之を廣く歐米諸國に亙りて批判的に論究したのである。そして彼の社會學の諸方針の分類に就ては、色々批評す可き點があるが、とにかく夫れは其の頃までの社會學の主要なる諸方針を、大體上包括して居ると見做し得られると思ふ。併し彼が同書中に於て、正當に取扱ふて居ないと思はれる一の方針がある。夫れは其の後力學的社會學と稱せられて居るものである。但し此の方針が著しく發達したのは、彼が同書第一版を公にした後であるから、彼が同書第一版中に此の方針を認めて居なかつたことには、恕す可き點もあるが、併し千九百十五年出版の同書第二版に於ても、更に千九百二十二年出版の同書第三版及び第四版に於ても、尙ほ此の方針を認めて居ないのは、彼の偏見に基因するものと思はれる。然るにパルトの社會學が、一層嚴密に云へば彼が唱へ出した社會學論が、先づ大に重要視されたのは、夫れはつまり力學的社會學の方針を、新たに數學的に發展させようとするものであるとしてゝあつた。そうして私が千八百九十年代の終り頃に、彼の社會學に關心し始めたのも、つまり右の意味に於てゝあつた。

今現代社會學の諸方針の包括的組織的研究に於て、力學的社會學を一の獨立な方針として、始めて大に重要視したのは、イタリノスキルラチエであるが、彼は千九百二年に公にせる好著作「社會學的諸學說」¹⁾に於て、力學的社會學として、Spencer, Fiske, Mismet, Sales y Ferre, Carey, Winarsky, Pareto, De Marinis, 等の社會學を批判的に論究して居る。但し其の頃までに、パルトが特に社會學に關して公にして居たのは、三つの論文²⁾だけであつた。

1) Dr Fausto Squillace, *Le Dottrine Sociologiche*, 1902.

2) Il compito della sociologia fra le scienze sociali. (*Rivista Italiana di Sociologia*, 1897). I problemi della sociologia. (*Rivista Italiana di Sociologia*, 1899.) Un'applicazione di teorie sociologiche (*Rivista Italiana di Sociologia*, 1900.)

そうして夫れによりて、吾々は只大體上、彼は社會學を如何に建設しようとするのであるかを、學び得るだけであつた。しかも當時我々社會學の專攻學生が、殊に私なぞが、パレトに大に望を囑して居たのには、種々な理由があつた。此處に其の中の主要なもの二つを、簡単に述べて置くが、其の一は當時の力學的社會學の方針の發達状態は、同方針に對して大なる關心を有する人々にありても、到底満足し得られないものであつたと云ふこと、其の二はパレトが千八百九十六年及び七年に公にせる經濟學上の著作¹⁾によりて成就せる、數學的經濟學の發達に對する大なる貢獻から推して、彼若し既に公にせる社會學上の論文によりて學ばれるが如き方針に於て、専ら社會學の研究に力を注ぐに於ては、力學的社會學の發達に對して同様に大なる貢獻を成就するであらうと、思はれたと云ふことである。以下右の二つの理由に就て簡単に述べる。

二 現世紀に至るまでの力學的社會學の方針の發達

ウイニアルスキーの社會力學

ソロキンが現代社會學の研究に關する彼の好著作²⁾に於て述べて居る處によると、スペクトルスキーは千九百年及び十七年に公にせる「第十七世紀に於ける社會物理學の諸問題」³⁾に於て、同世紀間に於ける社會物理學或は社會力學の著しき發達或は流行を、詳細に論究して居るとの事であるが、ソロキンの云ふ處によると今日同書を手に入れることは殆んど不可能な様であるから、私は只彼が紹介して居ることだけしか學ぶことが出来ない。併し夫れによりて私は同世紀の學者間に於ける社會物理學的或は社會力學的思想の勢力の大なりしことを、今さらの

1) Pareto, Cours d'économie politique Tome I, 1896; Tome II, 1897.

2) Sorokin, Contemporary Sociological Theories, 1928.

3) Spektorsky, Problema sozianoy physiki v XVII Stoletii, I, Warsaw, 1910; II, Kiev, 1917.

如くに驚いたのである。そうして又コントが社會學と云ふ新語を造る以前には、之を社會物理學と稱して居たとや、ケトレイが社會物理學を建設しようとしたことなどの歴史的背景或は由來を新たに學んだのである。尙ほ第十七世紀の社會物理學的或は社會力學的思想に就て大に注目す可きは、第十九世紀に於て新たに發達せるもの如くに、從來見做されて居た力學的社會學の方針の諸學說の根本的諸思想は、勿論組織的にはなく斷片的にはあるが、とにかく既に其の中に大體上發見されることである。

最初に力學的社會學の方針を、現代社會學に於ける重大な一方針として特に論究したスキルラチエは、さきに舉げし彼の著書が出版された千九百二年頃までの發達を、スペンサー、フィスク、ミスメア、サレス・イ・フェルレ、ケリー、ウィニアルスキー、パレット、デ・マリニス等に就て論究して居るのであるが、私は第十九世紀間の力學的社會學の方針の發達の最頂點を示して居るのは、ウィニアルスキーの社會力學であると認めるから、此處では只彼の社會力學に就て少しく考察し、第十九世紀に於ける力學的社會學の發達が、其の最頂點を示して居ると思はれるものに就て見るも、到底私の社會學的知識慾を満足させるものでなかつたことを、簡単に指示するだけに止める。但しソロキン¹⁾は上に舉げし彼の著書に於て、第十九世紀及び現世紀に於ける力學社會學の方針の發達を、更に社會物理學(ケリー)と、社會力學(バルチニコ、ハレット、レートカ)と、社會エネルギー學(ソルヴエー、ベヒテルフ、オストワルト、カーヴァー、ウィニアルスキー)と、數學的函數的純粹社會學(パレット、カルリ)との四方針に區別して論究して居るが、要するに私は現世紀の始めに於ては、ソロキンが社會物理學、社會力學及び社會エネルギー學と稱する三方針の何れの社會學に就ても満足せず、彼が數學的函數的社會學と稱するが如きもの、

1) 私は今より二十七年前、又ソロキンの著書に先だつこと十八年前、即ち明治四十三年に當時京都帝國大學文學部で發行して居た雑誌(藝文)に於て發表せる私の論文、(オストワルト氏の文化學と力學的社會學の發達)中には、スペンサー以後の力學的社會學の發達を三方針に大別して居たのであるが、ソロキンの如くに社會物理學と社會力學とを區別して、四方針に區別するのものと云ふ。

發達を、大に切望して居たのである。

ウィニアルスキーは千八百九十四年から千九百年に至るまでに、彼の社會力學を展開する爲めに、多數の論文を發表したが、まとまつた著書は一冊も公にして居なかつた。それで彼の社會力學の根本思想を、其の全體に互つて組織的に把握することは随分困難である。スキルラチェは其等の諸論文を一々吟味して、彼の著書中に之をかなり詳しく説述して居るが、併しソロキンが夫れを參考してより簡単に説述して居る方が、一層判然要領を示して居ると思ふから、此處ではソロキンの説述を引用して置く。²⁾

(1) ウィニアルスキーにありては、社會的聚合體 social aggregate は、相互に近づき合ひ又は退け合ふ不斷の運動中にある諸點、即ち諸個人の體系 system とある。

(2) 此等の運動の第一原因は引力である。

(3) 合力の如く此の引力は選擇的であつて、一定の線に添ふて、又一定の方向に於て、即ち快感の極大及び抵抗の極小へ進行する。かくて社會的引力或は社會的相互作用の諸現象は、純粹な力學的基礎を有つて居る。但し此の力學的引力は、有機物の間に於ては、無機物の間に於けるよりも、一層大なる複合性を有する。そうして夫れから發生し發達する心理的現象によりて包まれて居る。吾人の朋友選擇及び仇敵選擇は此の原理の一例である。

(4) 併し心理的現象其物は生物學的エネルギーの一變形に外ならない。尙ほ生物學的エネルギーも亦物理的化學的エネルギーの一形態である。されば吾人の選擇其物は純粹經濟學によりて示されて居る如く、力學的諸法則に従ふものである。男女間の引力或は牽引力は同一の原理の他の一例である。此の引力或は牽引力の根柢は精蟲と卵との引力或は合力である。此の引力は若い男女の相互的欲求に於て現はれて居るのであるが、彼等自身は彼等の欲求がかかる深大な推進力、衝迫力 *impulse* から生起して居ることを、常に認識して居ない。此の引力はヤハリ極大快感の原理に従ふて居る。そうして此の眞に性的である處の引力或は牽引力が充足されない時には、エネルギー變形或は變換の法則に従ふて、他の心理現象、例へば嬌態、裝飾、及び其の他の性的牽引の諸手段に昇華し、夫等のものは又藝術現象、審美現象を産出する。此の事は食物引力の如き引力の他の基本形

1) Squillace, Le Dottrine Sociologiche, pp. 106-119.

2) Sorokin, Contemporary Sociological Theories, pp. 23-28.

私は上にあげし私の論文(オストワルト氏の文化學と力學的社會學の發達)中に、ウィニアルスキーの社會力學の根本思想を述べて居るが、夫れはあまりに簡単に過ぎる恐れがあるから、此處ではソロキンの約述をあげて置く。併し極簡単に之を學びたいと思はれる人々は右の論文に於ける私の約述を參考されたい。

態に就て見るも同様である。かくの如くにして心理現象は生物學的エネルギーの一形態として解釋されるが、生物學的エネルギーは又物理的化學的エネルギーの一形態に外ならない。されば心理現象及び物理現象は結局力學の諸法則其物に還元されるのである。

(5) エネルギーは種々の形態を有し、其等の諸形態は相互に變形或は變換され得る。例へば位置的形態から運動的形態へ、又後者から前者へ變換され得る。そうして生命は物理的化學的エネルギーの一種特殊形態である。有機體は一般に、特に人間有機體はエネルギーの一體現及びエネルギー變換の爲めの機構である。

(6) 有機體によりて行はれるエネルギーの變形或は變換は、營養と生殖との二過程を通じて進行し、生命現象の領域に於ては、力學的引力の一般的法則は、性引力及び食物引力の形態に於て發現する。性慾と食慾とは云はゞ有機體一般の、特に人間の相互的牽引及び排斥を決定する第一次的推進力衝迫力である。人間は何よりも第一に此等の欲求の充足を求める。そうして人間が相互に諸種の契約に入り込むのは、つまり此等の欲求の作用の下に於てである。此の基本的事實は、一切の社會現象の起源、及び社會的諸團體によつて行はれるエネルギーの變換の一切の複雑な諸形態を説明するのである。

(7) 彈丸が障害物に打突かる時には、其の運動エネルギーを熱、光、電氣等の内部的エネルギーに變換せられるのと同じく、性慾及び食慾によりて推進される人間の諸團體の素朴な運動が、其等の欲求の直接充足を妨げる處の、自然環境に於ける障害物や、他の人間の團體に遭遇する時には、食慾及び性慾のエネルギーを経濟的、政治的、法律的、道德的、藝術的、宗教的或は學問的形態に變換させる。かゝる仕方に於て、生物學的エネルギーは心理的及び社會的エネルギーに變換される。ウィニアルスキーは、食慾及び性慾のエネルギーが如何にして發生し、又夫れが如何に複合的な心理的、社會的現象に變換されるかを説明しようとする此の理論を、更に詳細に展開しようといふ努力して居たのである。

(8) 更にエネルギー變換の此等の諸過程は熱力學の基本的諸法則に従ふて進行する。先づ第一に總て此等の變換に於けるエネルギーの分量は恒定的である。第二に熱力學の諸法則は、變化、分化、平等化或は同等化、支配及び歴史的進行等の社會現象を一般的に説明する。若し二つの物理的體系に於ける熱エネルギーの強度が均等でないならば、一の體系から他の體系へのエネルギーの轉移が行はれる。そうして兩者の差異が大なるほど、其の轉移過程が強い。此のエネルギー放射は常に熱エネルギーのより大なる強度を有する體系から、より小なる強度を有する體系へ進行する。そうしてかゝる意味に於て此の放熱過程は逆行不可能である。併し他方に於ては放熱が進行するにつれて、二つの體系のエネルギー強度に於ける差異は段々に減少し、遂に

兩體系は均等するに至る。是れは熱力學的過程の逆行不可能な方面である。かくて熱力學的過程は、只エネルギーの不均等、不平等が存在し、しかも進行が均等或はエントロピーへの傾向を有する時にのみ行はれるのである。處で今同一の基本的諸法則は心理的、社會的現象の領域に於ても亦行はれて居る。もろくの個人及び社會團體が填充されて居るエネルギーの分量及び強度の不均等は、一切の社會的及歴史的出來事、事件を説明するのである。一切の社會的及び歴史的出來事は個人から個人へ、又團體から團體へのエネルギーの放射の諸表現に外ならない。若しエネルギーが總ての個人に於て均等して居たならば、人間歴史の全ドラマは起らなかつたであらう。其の代りに死んだ均衡が永久的に存在したであらう。只力の強度の不均等がある處にのみ、運動、變化、生命或は歴史があるのである。同様に個人及び團體間に於けるエネルギーの不均等な分配は、不平等、分化、成層化、支配等々の如き、一切の社會現象を産出するのである。

熱力學に於て、熱エネルギー均等化の過程がより高い温度を有する物體から、より低い温度を有する物體へ進行する如く、より大なる心理的、社會的エネルギーを有する個人或は社會團體は、より小なる心理的、社會的エネルギーを有する個人或は社會團體へ其のエネルギーを放射するのである。されば不平等、搾取、支配、階級差別、キャスト成層化等の如き社會的分化或は差異化の一切の現象は、只より高きエネルギーの體系から、より低きエネルギーの體系への、エネルギー放射の一般的現象の諸表現に外ならない。併し物理學に於ては熱の轉移は夫れに關係する總ての物體に於ける熱の漸次的均等化を導くと同じく、社會的過程に於ける對應的轉移は社會的平等の生起及び増長を導く。是れが即ち社會現象の一切の領域に於ける自由の進歩、並に獨占及び其の他の特權の消失の説明である。不平等が大なるほど此の平等化の過程は強烈であるであらう。自由主義的、社會主義的、共產主義的及び平等主義的諸運動は總て此の社會的熱力學の基本法則の諸形態である。原始社會團體に於てすら、秩序、權力、法律及び社會統制は自發的に自然に現はれてくる。是れ單に、其の不平等から生起するエネルギーは、支配の形態に於て、より高い點から、より低い點へ移行行くが、併し決して其の逆が行はれないからである。エネルギーの放射はかくの如き仕方にて進行するから、相異なる諸強度の平等化への傾向が存在するのである。そうして此の平等化は、最早強度の差異が全くなれる一の均衡に到達されるまで進行し、かゝる均衡に到達された時には、熱力學の諸法則に従ふて、一切のエネルギーの變換は止むのである。

(9) されば將來に於ては、社會的エントロピー(死んだ不動的均衡の状態)は、全宇宙の歴史に於ける如くに、人類の歴史に於ても、如何様にかして實現されるであらうことは、論理的に推論される。今や個人、階級、キャスト、人種等々の平等化は大な

1) Winiarsky Méthode mathématique dans l'économie politique. (Révue Socialiste, 1894.) Essai d'une nouvelle interprétation des phénomènes sociologiques. (Révue Socialiste, 1896.) Deux théories d'équilibre économique (Révue Internationale de Sociologie, 1896.) Essai sur le mécanisme sociale (Révue Philosophique, 1898.) Die Mathematische Methode in der Soziologie und Politischen Ökonomie (Sozialistische Monatschrift, 1899.) Équation de l'équilibre esthétique. (Révue

る強度を以て進行して居る。吾人は既に社會主義的及び平等主義的諸運動の影響によりて、社會的エントロピーの永い過程の始めにあるのである。

(10) 以上述べ來りし處によりて考ふれば、社會科學の目的は、夫れの諸活動及び諸關係に於て、力學の諸法則に従ふ處の人間及び事物のエネルギー的體系を研究することにあるは明かである。そうしてかゝる研究が科學的であり得る爲めには、夫れは只質的な研究であるだけでなく、更に量的な研究であらねばならぬ。つまり社會現象は測定されねばならぬ。處で夫れが爲めには、社會科學は、經濟的エネルギーの尺度である處の貨幣の如き、測定單位を有たねばならぬ。そうして貨幣はエネルギーの一切の社會的變換の測定の單位として使用し得られる。其の理由は左の如くである。

生物學的エネルギーは社會現象の中心的動力である。夫れは、政治的、法律的、道德的、藝術的、學問的及び宗教的現象の諸形態に於ける諸變換を経て、遂に經濟的エネルギーに到達する。處で經濟的エネルギーは貨幣を通じて測定されるのであるから、夫れは生物學的エネルギー其物の測定に役立つのである。此處では經濟的エネルギーは、力學に於て熱エネルギーが演ずるのと同じ役目を演ずるのである。一の物質の、或は夫れの非物質的價値の社會的效用或は實利を、貨幣の社會的效用或は實利と比較することによりて、吾人は社會的事物に於けるエネルギーの強度及び總高の指數を獲得し、又之を同じ貨幣價値に於て表はされたる他の事物の指數と比較することによりて、量的社會力學の創設の爲めに必要である處の、接近的な量的資料の或物を獲得し得るのである。貨幣は一の一般的な社會的等量、生物的社會的エネルギーの一の化現及び人格化である。同時に貨幣は一の一般的變壓器であつて、物質的及び非物質的價値の大部分は、夫れに對應する貨幣費用を通じて生産され得るのである。そうして此の事が即ち物質的及び非物質的價値の大部分を、同一の貨幣の單位に於て測定され得るものとならしめるのである。此の量的社會力學を實現することは、將來のエネルギー學の仕事である。

ウィニアルスキの社會力學の根本思想は、以上述べし處によりて大體上學び得られると思ふが、夫れによりて察知される如く、現世紀の始め頃までには、力學的社會學の方針を彼ほど發達させた人はないのである。實に夫れまでの力學的社會學の方針は、少なくとも一定の意味に於ては、彼によりて大成されたとも見做し得られる。されば吾々は彼の勞作によりて教へられる處少なくなく、又幾多の重要なヒントを與へられたのである。併し夫れ

Philosophique, 1899.) L'équilibre esthétique, (Révue Philosophique, 1899.) La teoria della proprietà e della famiglia, (Rivista Italiana di Sociologia, 1899.) L'énergie sociale et ses mensurations, (Révue Philosophique, 1900.) Sur la sociologie pure, (Revue Internationale de Sociologie 1900.) Quelques rectifications au sujet des essais récents de sociologie pure de M. Groppali, (Revue Internationale de Sociologie, 1900.) L'enseignement d'économie politique et

と同時に、彼によりて大成された形態に於ては、力學的社會學なるものは、根本的には如何に偏狹なもの、又或意味では淺薄なものであるかゞ學ばれるので、私は夫れによりて到底私の社會學的知識慾を満足させることが出来なかつた。要するに彼の社會力學は、本來唯物論哲學を基礎として居ると云ふ點に於て、科學としての社會學ではなく、一種の社會哲學である。尙ほ科學としての社會學として見ても、社會現象の物質的方面をあまりに偏重して居る點に於て、其の研究はあまりに偏狹である。更に彼の社會力學に於ては、社會的現實態が現實態の一種として物理的現實態と共有する方面は、かなり詳しく研究されて居るが、併し夫れが物理的現實態から區別される夫れ自身の特有性の方面は、全く看過され、或は無視され、かくて社會的現實態は只夫れの外面に於て把握されて居るだけに止まり、夫れ自身特有の内面に於ては深く把握されず、否な其の特有の内面はあまりに外面に引まつけられて曲解されて居る。そうしてかゝる意味で、彼の社會力學は淺薄な社會學、興行の淺い社會學であるとも云ひ得られるのである。

抑々私は上に述べし如く、早くから力學的社會學の方針には少なからぬ關心をもつて居たが、併し根本的には同方針に於て私の社會學を建設しようとして居たのでない。私は先づタールドやジムメルの社會學の方針に従ひ、併し私自身獨特の意味にて、心と心との相互作用及び相互關係の概念を規定し、そうして心と心との相互作用及び相互關係を、現實な事實に就て一般的に研究し、次に之れに基いてあらゆる方針の社會學の研究を綜合し、具體的な一切の社會現象を全般的、包括的に研究しようと企だてゝ居たのである。是れが始めから私の社會學の根本方針であつたので、そうして心と心との相互作用及び相互關係の研究を、結局函數的相互依存の關係に

於て出来るだけ精密に公式化する爲めに、力學的社會學の方法、殊に其の數學的方法を利用し、更に又一切の具體的社會現象の全般的、綜合的研究に於て其の諸部類間の關係を、一方的因果關係に於て決定しようとする一般の考へ方を排斥し、函數的相互依存關係に於て決定する爲めに、やはり力學的社會學の方法、殊に其の數學的方法を利用しようと目論んで居たのである。されば全く唯物論的に力學的社會學を發展させようとする、ウィニアルスキの社會力學の如きものに對しては、夫れによりて教へられる處少なくないに拘らず、根本的には之を排斥して居た。そうしてパレットが千八百九十七年に公せる *Cours d'économie politique* から推して、彼が建設しようと企だてゝ居た數學的社會學は、私の目的の爲めに最も有益であらうと考へて、彼の社會學の出版を大に待つて居たのである。要するに私はさきに引用せるソロキンの言葉を借りて云へば、つまりパレットが嚴密な意味での「數學的函數的」社會學として、力學的社會學を發展させることを希望して居たのである。然るにパレットは中々に彼の社會學上の大著作を公にしなかつたし、又其の間に私は他の諸方面の研究に専ら力を注いで居たが爲めに、いつしか力學的或は數學的社會學に對する興味は薄らいで居た。處で千九百十六年に至つて、彼の社會學上の大著作が遂に出版されたことを雜誌上で見て、直ちに之をとりよせ精讀したのであるが、一方に於ては私の豫期して居たことが、私を十分に満足させるまでには成就されて居ないことを學ぶと同時に、私が豫期して居なかつたことが、甚だ詳しく論究されて、同書の大なる部分を占めて居ることを學んだ。併し其の頃私は、現代社會思想の社會學的研究に大に力を注いで居たが爲めに、パレット社會學に對する私の評價をとりまとめて公にする暇はなく、其のまゝに過して來たのである。然るに其後、殊にファスシストが政權を獲得して以來、伊太利に於てパレ

- 1) *Trattato di Sociologia Generale*, Vol. I, pag. LXXII-757; Vol. II, pag. 886. Firenze Barbera, 1916. Seconda edizione, Vol. I, pag. CXVII-431; Vol. II, pag. 540; Vol. III, pag. 673. Firenze Barbera, 1923.
 第一版佛譯、*Traité de sociologie générale*, Vol. I, 1917; Vol. II, 1919.
 第二版英譯、*The Mind and Society*, 1935. Vol. I, *Non-logical Conduct*; Vol. II, *Analysis of Sentiment (Theory of Residues)*, Vol. III, *Sentiment in*

ト社會學が大なる勢力を振ふて來ただけでなく、他の諸國に於てもフアスシスモの理論的基礎を究明する爲めや、又學問的價值から見て、パレット社會學が大に注目されて來た。殊に米國に於ては、近來パレット思想を重要視する、或は崇拜さへする傾向が勃興し來り、そうして彼の「一般社會學」の英譯が、多年の勢力を費して一昨年出版されるや、直ちに最も賣れ行きのよい出版物の一に數へられるに至つたと云ふことである。されば私が上に述べしが如き事情の下で、彼の「一般社會學」が出版された時に、彼の社會學に對して抱いて居た思想を、今日の私の立場から見て修正し、且つ一層精練して公にすることは、決して無益ではあるまいと思ふ。併しや詳しくは當大學法學部の講義に於て述べるつもりであるから、此處では只現代社會學に於けるパレット社會學の地位に就て、少しく述べるだけに止めて置く。

三 力學的社會學の數學的函數的方面の發展としてのパレットの社會學

私はさきに述べし如く、早くから力學的社會學の方針に關心を有つて居たに拘らず、前世紀の終り頃或は現世紀の始め頃までに建設されて居た同方針の何れの社會學にも、共鳴することが出來ず、そうしてパレットが千八百九十七年出版の *Cours d'Economie Politique* に於て經濟學に適用せる方法を、社會學にも適用して、新しき社會學を建設しようとなつて居るのを見て、彼の努力に大に望を囑し、彼によりてソロキンの云ふ數學的、函數的社會學なるものが、大成されることを切望して居たのである。されば、千九百十六年にパレットの *Trattato di Sociologia Generale* が出版されるや、私が同書に就て先づ第一に注目したのは、彼はどれほどまで、力學的社會

學の方針に於ける數學的函數的社會學の建設を成就したかと云ふ點であつた。

今パレトは同書に於て、先づ從來の社會學は、總て根本的には彼の云ふ *scienza non-logico-sperimentale* 非論理的、非實驗的或は非經驗的學問として建設されて居るものであるとして、つまり神學的或は形而上學的に構想され、絶對的な眞理或は必然的な法則を措定しようとするものであるとして、大に之を排斥し、そうして彼自身は社會學を彼の云ふ *scienza logico-sperimentale* 論理的、實驗的或は經驗的學問として、即ち私の云ふ嚴密な意味に於ての科學として、つまり經驗的事實があるがまゝに經驗的に考察し、其の間に存在する相對的な、蓋然的或は確率的なもろゝの齊一性 *uniformità* を發見しようとする學問として、建設しようとするのである。要するにパレトは社會哲學或は哲學としての社會學を排斥し、社會學は科學として建設されるに於て、始めて眞の學問即ち眞理を發見する學問として、發達し得るのであると確信し、科學としての社會學を建設することに全力を注いだのである。但し彼は眞理の範疇と *utile* 實利或は效用、或は有用(個人的又は社會的)の範疇とを區別して、兩者を同一視する從來の學者の通弊を排し、かくて眞理を發見する眞の學問としては、彼の云ふ論理的、實驗的或は經驗的學問、即ち科學を大に重要視し、そうして彼の云ふ非論理的、非實驗的或は非經驗的學問、即ち哲學或は形而上學や神學を大に排斥したが、併し有用或は實利の範疇から見れば、非論理的、非實驗的學問、即ち哲學や形而上學や神學が、個人或は社會の生存に對して甚だ屢々有用であり、又必要である場合があるに反して、論理的、實驗的學問、即ち科學が、屢々個人的又は社會的に有害である場合が、あり得ると考へたのである。

尙ほパレトの論理的、實驗的學問の概念に就て、特に重要視す可きものがある。夫れは彼は彼が論理的、實驗

的學問即ち科學の認識目標或は生命と認める齊一性 *uniformità* は、因果關係（彼の解する意味では一方的因果關係と稱す可きもの）の齊一性を意味するものでなく、相互依存 *interdipendenza* の關係或は函數關係の齊一性を意味するものであると解して居ることである。そうして私は科學を此の如き學問と解することによりて、科學の眞義は始めて正當に又充分に把握され、發揮されるものと考へて居るので、かくて私は彼の論理的、實驗的學問即ち科學の概念を、大に重要視して居るのである。

但し私は彼は科學の眞義を正當に了解して居たが、併し哲學の眞義を正當に了解して居なかつたと考へ、そうして夫が爲めに彼は科學としての社會學の概念を學問論的には正當に構成して居ながら、實際に於ては社會學を嚴密な科學として建設することが出來ず、夫れの中にいつの間にか、彼が意識的には排斥して居た哲學的形而上學的思索を無意識的に混入し、遂には彼の科學としての社會學を、實質的には一種の社會哲學に變質させて仕舞ふたと考へるのである。要するに彼は吾人の知識慾或は學問的慾求は、科學の與へる相對的蓋然的經驗的知識だけでは、決して完全に充足されるものでなく、更に必ずや絕對的、必然的、先驗的知識を渴望するもの、そうしてかゝる知識は只哲學或は形而上學によつてのみ與へ得られるものであることを、まだよく會得して居なかつたと思はれるのである。

パレトは右に述べし如く、社會學を先づ彼の云ふ論理的、實驗的學問として、即ち嚴密な意味に於ての科學として、建設しようとしたのであるが、然らば、彼は、やはり論理的、實驗的學問として建設さる可きものと見る他のものゝ社會科學から區別して、社會學の一般的概念を如何に規定しようとしたか。此の問題に就て彼の論述して居ることは、あまり判然して居ない。併し少なくとも社會學の一方面或は一部門の概念を、正當に規定して居ると思はれる。要するに彼は社會學は一般的社會科學として、諸般の特殊的社會科學を綜合し、そうして一定の諸勢力の作用の下で、或は一定の諸要素、諸因素によりて、決定されるがまゝの人間社會の一般的形態、つ

まり社會的均衡を其の靜態及び動態に於て考察し、之を量的に認識しようとする一の論理的、實驗的學問即ち科學として、建設さる可きものと考へたのである。かくて彼の社會學は一般的には力學的社會學の方針に屬するものと見做されたのであるが、併し實質的或は内容的には、彼の社會學は、力學的社會學の方針に屬する他の諸家の社會學とは異なつて居る。夫れは、私がさきに第十九世紀間の力學的社會學の發達を大成せるものとして、少しく述べて置いたウィニアルスキーの社會力學と異なつて居るのみならず、其の後發達せるソルヴェー派の社會エネルギー學や、¹⁾ オストワルトのエネルギー學的文化學²⁾とも異なつて居る。そうして私が早くからパレト社會學の最も勝れた特徴と認めて居たのは、社會的均衡を其の靜態及び動態に於て考察し、之を量的に認識すること、即ち人間社會の一般的形態を、所謂數學的函數的に研究することを、其の眼目として居ると云ふ點であつた。是れは彼が大成せる數學的經濟學から出發し、之を模範として建設しようとする彼の社會學に於ては、當然であると思はれる。³⁾ されば私は實質的内容的には、力學的社會學の方針の諸家の社會學を、一般的には排斥して居たに拘らず、パレトの社會學に對しては、大に望を囑して居たのである。併し彼の *Trattato di Sociologia Generale* は、彼の多年間の非常な努力によりて產出された一大著作であることは、何人も承認せざるを得ないと思はれるに拘らず、同書に於て彼が遂成せる限りに於ては、私はかねての期待から見て少なからぬ失望を感じたのである。殊に彼の社會學に於ける量的研究は、彼が純粹經濟學に於て成就せるものに比すれば、遙かに劣つて居ると思はれる。但し社會學に於て取扱はれる複合的な社會現象は、純粹經濟學に於て取扱はれる純粹經濟現象に比すれば、遙かに複雑なものであるから、之を量的に研究しようとしても、到底純粹經濟現象を研究する場合に於てほ

- 1) ソルヴェー派の社會學に就ては、其の一般は拙著戀愛と人間愛(大正十二年出版)を見られよ。
- 2) オストワルトの文化學に就てはさきにあげし私の論文、オストワルト氏の文化學と力學的社會學の發達を見られよ。
- 3) パレトの數學的經濟學上に付ては、經濟論叢昭和五年三月號の私の論文、數學的經濟學の概念、同七月號の私の論文、數學的經濟學の論理的構造(上)ヲ

どの結果を収め得ないのは當然であるかも知れない。かくて私が其の點に於て、早くからパレト社會學に期待して居たことは、私の幻想に過ぎなかつたかも知れない。尙ほ社會學に於ては、量的研究は全然不可能であると主張する社會學者は少なくないが、併し私はクールノーを尊崇するタールドの考へ方や、ギッディングスが重要視せるパウレーの不精密統計法などの影響を、早くから受けて居たが爲めであるかも知れないが、又始めクラークに就て經濟學を學んだが爲めであるかも知れないが、とにかく社會現象の量的研究の効果は、決して輕視さる可きものではないと考へて居る。そうしてパレトが社會學に於ても、經濟學に於けるほど敢て努力したならば、たとひ經濟學に於て成就せるほどは成就し得なかつたとしても、かなりな効果を収めることが出来たであらうと信んずる。此の問題に就ては此處で詳しく論ずる暇はないが、近頃フォン・ウイゼも大體上私と同様な考へ方を發表して居る。¹⁾甚だ簡單ながら以上述べし處によりて指示せる如く、パレトが彼の大著作 *Trattato di Sociologia Generale* に於て成就せることは、私が早くから彼の社會學に對して、大に期待して居たことを、十分に満足させて居ないので、私は少なからぬ失望を感じたのであるが、夫れと同時に又私は同書に於ては、彼の社會學に對して私があまり豫期して居なかつた方面が、大に展開されて居ることを學んだのである。そうして其の方面に於て考察すれば、彼の社會學は單に力學的社會學の方針を、新たに發展させたものと認められるだけに止まらず、更に他の方針をも發展させて居るものと認めらる可きであると思ふ。

四 心理學的社會學或は行動主義 (Behaviorism) 社會學の方針の

ルラの數學的經濟學の論理的構造、同八月號數學的經濟學の論理的構造(下)パレトの數學的經濟學の論理的構造を見られたい。尙ほ同昭和六年三月號四月號及び五月號の私の論文、數學的經濟學の論理的構造の批判を參考されたい。

- 1) Von Wiese, *Allgemeine Soziologie*, Zweite, Neubearbeitete Auflage, 1933.
Von Wiese, Pareto als Soziologe, in *Zeitschrift für Nationalökonomie*, Band VII, Heft 4, 1936.

一 發展としてのパレトの社會學

パレトは上に述べし如く、社會學は一定の諸勢力の作用の下に於て、或は一定の諸要素、諸因素によりて、決定される人間社會の一般的形態を量的に研究する科學であると認めたのであるから、社會學は先づ第一に、其等の諸勢力或は諸要素或は諸因素の總てを識別し、其等のものが如何に作用するか、殊に量的に作用するかを研究せねばならぬと考へたのは當然である。併し其等のものは實に無數であるから、一々之を研究することは、實際上殆んど不可能である。それで彼は先づ之を(1)外部的諸要素としての土地、氣候、植物區系、動物區系、地質學的狀態、礦物學的狀態等々と、(2)一定の時期に於て、與へられたる社會に外部的な他の諸要素、換言すれば、かかる社會の上に行はれる他の諸社會の諸作用、即ち空間に於て外部的な諸作用、及びかかる社會の以前の狀態から生ぜる諸結果、即ち時間に於て外部的な諸結果と、(3)内部的な諸要素、(夫れの主要なるものは人種、殘基 *residui* 或は夫れが表現する感情、もろゝの性向、利害、推論能力、觀察能力、知識狀態等々にして、派生 *derivazioni* も亦其の一種である)との三部類に大別して居る。併し彼が其等の諸要素或は諸勢力中で、特に詳しく研究して居るのは、殘基及び派生 *residui e derivazioni* の二要素或は二勢力である。彼の *Trattato di Sociologia Generale* 三卷十三章中、第六章から第十一章に至るまでの六章、又全部二千六百十二節中、第八百四十二節から第二千五十九節に至るまでの千二百十七節、又全部千六百四十六頁中の八百四頁は、全く殘基と派生との二要素、或は二勢力の研究に當てられ、其の他の諸章に於ても其等の二要素に關係する部分は少なくない。かくて同書は大體から見ると、専ら殘基と派生との二要素を研究するものであるとも云ひ得られる。尙ほ彼は根本的に最とも重要視して居るのは、

彼が殘基と稱するものである。

然るに彼は彼が殘基と稱するものゝ概念を、一般的に規定して居ないから、一般的に夫れは何であるかを、判然把握することは甚だ困難にして、夫れの眞義に關しては今日學者間に種々異論があるのである。併し此處では此の問題を詳しく論述する暇はないから、只實際上彼は如何なるものを殘基と稱して居るかを、簡單に指示するだけに止めるが、要するに彼は先づ殘基 *residui* を、結合の本能 (*istinto delle combinazioni*) と、集團或は團結體の持續或は保存 (*persistenza degli aggregati*) と、外部的行動或は行爲を以て感情或は情念を表現しようとする欲求 (*bisogno di manifestare con atti i sentimenti*) と社會性と關係する殘基 (*residui in relazione colla socialità*) と、個人及び夫れ所屬物の保全性 (*integrità dell' individuo e delle sue dipendenze*) と性的殘基 (*residuo sessuale*) との六科に大分し、更に各科を幾多の屬及び種に小分して居る。そうして彼が彼の殘基と稱するものをさほど大に重要視したのは、つまり彼が人間社會に於て觀察される事實として大に重要視せる、人間の行動或は行爲(個人的及び社會的)の根元或は原動力として、根本的に最もも重要なものは、即ち彼が殘基と稱するものであると考へたからである。

パレットは人間社會に於て觀察される事實を根本的に二大部類に區別して居る。(一)は所作、或は言語によりて實現されるものゝ本能、感情或は情念、性向、欲求等々や、經濟的利益或は利害などの表現 (*manifestation*)、及び其等の表現から引き出される論理的或は偽而非論理的 (*pseudo-logiche*) 結論或は推斷である。されば此の部類は論理的行動及び非論理的行動を包含して居る。そうして非論理的行動に關する部分は、更に二つに別たれる。一は言語的表現を産出する非論理的行動にして、二は何等の言語的表現をも産出しない非論理的行動である。尙ほ言語的表現を産出する非論理的行動は、殆んど變化しない部分、即ち殘基 *residui* と、甚だ變化し易い部分即ち派生 *derivazioni* との二つの部分に別たれる。(二)は人間社會が生存して居る環境の他の

一切の事實である。

甚だ簡單ながら右に述べし處によりて示せる如く、パレトは人間社會に於て觀察される事實として、人間の個人的及び社會的行動を根本的に重要視し、そうして夫れの根元或は原動力として最も根本的なものは、彼が残基と稱するものであると認め、かくて彼が残基と稱するもの及び夫れから引き出される處の彼が派生 (Derivation) と稱するもの、即ち今日行動主義社會學に於て言語反動と稱せられるものや、或は廣くイデオロギーと稱せられるものなどを、特に詳しく論究して居るのであるが、かくて其の研究は心理學的社會學、殊に行動主義社會學の方針と、大體上一致して居るのである。されば吾々はパレトの社會學を、行動主義社會學の方針の一發展と見做して之を研討することによりて、力學的社會學の方針の一發展として認められる夫れの重要な意義の上に、更に新しき意義を認めることが出来るのである。今日伊太利の知名な社會學者エフ・カルリは、其の點に注目して、パレト社會學を研究して居る様であるが、彼の研究はまだ十分でないと思はれる。それで私は其の點に於て更に深くパレト社會學の意義を究明したいと思ふが、此處では最早餘白がなくなつたので、他日別に論述することとする。

五 社會哲學としてのパレトの社會學

パレトの社會學は、以上述べ來りし處によりて知られる如く、科學としての社會學に於て、先づ力學的社會學の方針の數學的函數的方面を、特に大いに發展させたものとして、次に又行動主義社會學の方針の一發展として、現代社會學上重要な地位を占めるものと認めらる可きであるが、更に彼の社會學は一種の社會哲學として、現代の社會的、政治的、文化的運動に對して、實際上甚だ重要な意義を有するものであることが發見される。要するに彼が熱烈なマツツイ主義者であつた彼の父の思想に反抗し

- 1) Filippo Carli, Le Teorie Sociologiche, 1925, Cap. V, L'indirizzo attivista e il sistema del Pareto.
Filippo Carli, Paretos soziologiscoeches System und der Behaviorismus, in Kölner Vierteljahrsheft für Soziologie, 4. Jahrg. Heft 3 u. 4, 1925.

て、早くかゝつて居た反人道主義的、反デモクラシー的、反共和主義的態度が益々發達して、暗にフアスシスモの理論的基礎を築き上げつゝあつたのである。かくてムツソリーが勢力を獲得するに至つて、彼はフアスシスモの理論的先覺者として、又フアスシスモの理論的基礎を据へ附けた學者として、大いに尊崇されて來たのである。さきに述べし如く、社會科學に於ては、神學、形而上學、哲學を大いに排斥して居た彼が、一種の社會哲學を築き上げて居たと云ふことは、一見すれば奇異に感じられるが、併し夫れは思想史上、學問史上一般に見出される事實にして、決して怪むに足らないのである。さきにも述べし如く、吾人の知識慾、學問的欲求は嚴密な意味に於ての科學のみによりては、決して完全には満足され得ないものにして、必然的に哲學的知識を要求するものであるから、かくて哲學の眞義を了解せずして、之を排斥しようとする人々は、彼等が科學として建設しようとする學問の中に、イッシカ無意識的に哲學的思索を混入し、夫れによりて、彼等の學問的欲求の全體を満足させなければならぬ。さればパレトも哲學の眞義を正當に了解せずして、意識的には大いに哲學を排斥しながら、彼が論理的實驗的學問として建設しようとする社會學の中に、イッシカ無意識的に哲學的思索を混入し、實質的には之を哲學化して仕舞ふて居たのである。ボルケナウの如きは、パレトの社會學は根本的には一種の社會哲學に外ならぬものゝ如く批評して居る。そうして私はパレトの社會學は、一種の社會哲學としてはフアスシスモの如き社會的政治的文化的運動の發達を、理論的に準備して居たと考へるので、かくて彼の *Sociologia Generale* は、彼の社會哲學をも論述して居るものと認め、彼の他の諸著作中彼の社會哲學上特に重要と思はれるものを参考しつゝ、彼の社會哲學の根本思想を研究し、フアスシスモの學問的基礎を築くものとして、夫れは如何なる意義を有するかを考察したいと思ふのであるが、既に内規の頁數を超過して仕舞ふたので、此の問題も他日別な論文に於て論述したいと思ふ。但しパレト自身はフアスシスタであつたかどうかと云ふことに就ては、彼はフアスシスモに賛成するか、又は反對するかと云ふ問題に關して、彼の意見を判然言明することを避けて居たが爲めに、吾々は判然と斷定することは出来ないのである。

(昭和十二年三月三十一日)

- 1) Franz Borkenau, Pareto, 1936.
- 2) V. Pareto, Les systèmes socialistes, I et II, 1903.
" " Fatti e teorie, 1920.
" " Trasformazione della democrazia, 1921.